

# ホステル

2007(平成19)年1月6日鑑賞(ユウラク座)

★★★★



監督・脚本・製作＝イーライ・ロス／製作総指揮＝クエンティン・タランティーノ／出演＝ジェイ・ヘルナンデス／デレク・リチャードソン／エイゾール・グジョンソン／バルバラ・ネデルヤコーヴァ／ヤナ・カデラブコヴァ／ヤン・ヴラサーク／リック・ホフマン／ジェニファー・リン／特別出演＝三池崇史（ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2005年アメリカ映画／93分）

……クエンティン・タランティーノ監督がプレゼンター・製作総指揮として参加した拷問ホラー映画がコレ！ 2006年の新年早々アメリカで大ヒットした作品だが、大阪ではユウラク座1館のみの公開だから、所詮ヒットはムリ……？ 東欧のスロバキアを舞台とした、主人公3人のドラッグ、女、酒の陽気な旅は、後半一転して恐怖のどん底へ。この映画の見どころは、スリリングな終盤の脱出劇と復讐劇。ホラー映画の楽しみ方が少し理解できたような気も……。

## 3人の主人公は……？

映画の前半は、ヨーロッパ各地をバックパッカーしているアメリカから来た大学生のパクストン（ジェイ・ヘルナンデス）とジョッシュ（デレク・リチャードソン）、そしてフランスでこれに合流したアイスランド人のオリー（エイゾール・グジョンソン）の3人が、ドラッグと酒と女を楽しむ姿が描かれる。この3人の主人公はいかにも今ドキのアホバカ学生（？）だが、日本人と違って性的欲望が丸出しであるうえ、ドラッグが大好きだからかなり始末が悪い……？

今日彼らが泊まっているのはオランダのアムステルダム某ホテルだが、アムステルダムの「飾り窓の女」はチョー有名。私も20年前に訪れたことがあるが、たしかにセクシーな美女が多く、男の欲望を大いにそそるもの……。といっても、私は通路から恐る恐る覗いてみただけだが……。

## 見るべきか、見ざるべきか……？

チラシを読み、パンフレットを丹念に読めば、この映画が2006年の新年早々に全米で封切られ、興行成績初登場第1位の大ヒットを記録した、ホラー映画ファン待望の作品であったことがよくわかる。しかし、大阪では天六にあるユウラク座1館のみの公開だから、多くの映画ファンが知らないのは当然で、例によって観客はおっさんばかりの20名ほど。もともと私はホラー映画が大嫌い。しかも予告編を観たところでは、残忍な拷問シーンが売りモノのようなイメージ。したがって私は、よほど観る映画がない場合の「補欠」扱いとしていたのだが……。

## タランティーノと三池崇史の誘惑が……

予告編を観て強く印象に残ったのは、この映画はクエンティン・タランティーノ監督がプレゼンター、製作総指揮をしているということ。パンフレットを熟読すると、この映画の製作、監督、脚本をしたイーライ・ロスもかなり有能で有名な監督らしいが、私がそこまで知らなかったのは当然……？ しかし、タランティーノ監督の『キル・ビル～KILL BILL～Vol.1』(03年)、『キル・ビル～KILL BILL～Vol.2』(04年)は楽しく観ることができた映画だったし、同監督の変人ぶりもよく理解していた。そのうえ、昨年6月25日の4級受験、12月3日の3級受験と2度の映画検定の受験勉強をした中で、勉強した知識の1つが、ロバート・レッドフォードが『明日に向かって撃て！』(69年)のギャラを基にして、ユタ州に設立した「サンダンス・インスティテュート」。これは、映画人養成と援助を目的にした機関で、プロの映画人が指導に当たり、さらに1985年からはサンダンス映画祭というインディ映画の映画祭を開催して、クエンティン・タランティーノ、ロバート・ロドリゲス、ブライアン・シンガーといった新進の映画人を世に送り出している(『映画検定 公式テキストブック』205頁参照)。

他方、『着信アリ』(04年)、『IZO (以蔵)』(04年)、『妖怪大戦争』(05年)、『46億年の恋』(05年)などの三池崇史監督作品は、私はあまり好きではないが、注目すべき監督であることはたしか。

そんなタランティーノ監督がプレゼンターとして参加し、自ら「素晴らしい。

稀に見る作品だ」と書き、三池崇史監督が「出てはいけないものに出てしまった……上映禁止になるまえに劇場へ走れ！　そして叫ぼう、『痛いて美しい！』」と書いているチラシがかなり強烈に私を誘惑してきた。結局そんな誘惑に負けて、公開初日の1月6日（土）の夕方、ユウラク座に足を運ぶことになったが……。

## 舞台はタイから東欧のスロバキアに変更……

この映画はそのタイトルどおり『HOSTEL』が舞台だが、それは映画の前半、陽気な3人組がドラッグと女と酒に明け暮れる楽しい時期だけ。このホステルがあるのは東欧のスロバキア。本来はチェコスロバキアといえば、スメタナの『モルダウ』などで有名な美しい国だが、最近は大統領選挙をめぐる毒殺騒ぎのあったあの物騒な国……？　また東欧はドラキュラ伝説で有名……？

そんな東欧の国スロバキアを舞台にしたのは、3人の陽気な若き旅人たちが恐怖のどん底に陥る舞台として最適と考えられたため……？　もっとも、パンフレットに4頁にわたって綴られているプロダクションノートによると、この映画はもともとはタイを舞台として想定していたとのこと。すなわち、金さえ出せばスリリングな殺人を体験できるという、タイで実際に存在する合法的なシステムに乗っかってドキュメンタリー風に製作しようとしたらしい。しかし、そんなヤバイ真実を露骨に映画で暴露すれば、「殺人によって利益を得ている組織の関係者が知ることになったら、関係者は無事でいられるだろうか」と考え、製作の進行は保留になったとのことだ。

スクリーンに登場するそんな3人の旅人にアムステルダムで声をかけたのは、自分自身もドラッグでハイになっている男アレックス。彼は、「女が目当てなら最高の女たちが待っている町がある」と言いながら、女たちと楽しんでいるデジカメの画像を次々と見せつけたから、3人はもうたまらない。急遽彼らの行く先は、スロバキアのブラティスラバという町にあるホステルに決定！

## そのホステルはまるで龍宮城……？

アレックスから聞いたホステルに到着すると、「夜の帝王」という名前で予約していたバクストンたちを迎えた受付嬢もバツピンなら、ルームメイトとなった

ナターリア（バルバラ・ネデルヤコーヴァ）とスベトラニヤ（ヤナ・カデラブコヴァ）も東欧美人！

おっと、大切なことを忘れていた。3人がブラティ斯拉バへ向かう列車の中で同席となったちょっとヘンなおじさんの紹介を忘れてはダメ……。一瞬オカマかとまちがえそうになったこのおじさんは、なぜか「ブラティ斯拉バの女たちは最高だ」とアレックスの言葉を補強してくれたうえ、「特にアメリカ人がモテるんだよ」というパクストンとジョッシュには何ともうれしい言葉まで……。

そんな言葉どおり、3人が入ったホステルはまるで龍宮城。一緒に温泉<sup>スバ</sup>に入って意気投合し、ダンス、ドラッグ、酒そして「ベッドイン」と3人はやり放題、楽しみ放題……。アムステルダムでは、他の2人と違ってドラッグを吸う勇気もなければ、女と楽しむことも避けていたジョッシュでさえ、ここでは別人のよう……。しかし、この世のパラダイスはここで終わり。楽しい前半戦とはうって変わって、後半戦は大変……。

## 中盤は緊迫感と恐怖感がいっぱい……

観客に緊迫感と恐怖感を植えつけるには、美しいけれども薄暗い画面と不気味な音楽が不可欠だが、セリフは少ない方がベター。また不気味な部屋、不気味な拷問の小道具、そして不気味な姿カタチをした男たち、それをどう演出するかがホラー映像のクリエイターたちの腕の見せどころ。したがって、それはあなた自身の目でたしかめてもらうしかない。

最初にホステルから姿を消したのはオリー。残った2人には、「帰国する」とのメールが届いたが、どうもオリーはアジア系の女と一緒に消えたいらしい。不審に思ったパクストンとジョッシュは町中を探したが見つからず、結局2人は「勝手に消えた者は仕方ない」と考えを切り換え、もう一晩の楽しみを享受しようとしたが、それが2人の運の尽き……？

まずお楽しみの中、意識を失ったジョッシュが気づいたところは……。そして、同じく意識を失ったまま一晩を過ごしたパクストンが、翌朝踏み込んだ不気味な建物内では……？

## 終盤は脱出劇と復讐劇に……

パンフレットにあるプロダクションノートを熟読したところによれば、この映画を製作・監督し、脚本を書いたイーライ・ロスは、マイク・フレイスとクリス・ブリッグスという2人の『テキサス・チェーンソー』のプロデューサーたちと面識を得て、『ホステル』の話題で盛り上がったとのこと。私が昨年10月24日に観た『テキサス・チェーンソー ビギニング』（06年）もそりゃ恐ろしい映画だったが、これも映画終盤は脱出劇になり、ハラハラドキドキの連続。そして、やっと脱出に成功したと思ったとたん……？ このように、ホラー映画といっても、これでもか、これでもかと恐ろしいシーンを積み重ねればいいというものではなく、ストーリーの起承転結をつけることが大切。そんな目でみると、この映画の主人公は3人ではなく、実は3人の中のパクストンただ1人。なぜなら、他の2人はあっけなくダウンしてしまうのに対し、このパクストンだけは何とか恐怖の拷問から逃れたうえ、脱出劇の主人公になるから。したがって、この映画終盤の焦点は彼の脱出劇の成否にある。そして、その結末は……？

## 三池監督の登場とアジア系女性の登場

タランティーノ監督の遊び心の面白さは『キル・ビル～KILL BILL～Vol.1』『キル・ビル～KILL BILL～Vol.2』をみれば明らかだが、タランティーノ監督の友人であるイーライ・ロスも同じような遊び心を持っているらしく、何と彼が尊敬する三池監督を役者として登場させた。そのシーンは少し意識していれば誰にでもはっきりわかるものだが、別に取り立てて話題にするほどのシーンでもないことだけ、あらかじめ告知しておきたい。

それよりも面白いのは、多分三池監督を登場させたことの絡みだろうか。この映画で「恐怖の館」として使われた、1915年に建てられ現在は閉鎖されている精神病院内にアジア系の女性カナ（ジェニファー・リン）を登場させていること。ストーリー構成上、特に必要性があるとは思えないが、彼女がパクストンの脱出劇の中、どのような役割を果たすのかが、イーライ・ロス監督のスタンスを見るうえで興味深い。『007』シリーズ第21作目となった『007/カジノ・ロワイヤル』

(06年)は、殺しのライセンスを持つに至るジェームズ・ボンドが本気で女にホレる姿を描いて好評だが、この『ホステル』における、アホバカアメリカ人学生が脱出劇の中で見せるヤンキー魂は……？ 恐い恐いと思いつつ観ていたホラー映画だったが、終わってみると何となくアメリカ讃歌的……？

## 🎬 『ホステル Part 2』も観る……？

パンフレットを熟読したところ、この『ホステル』と同じスタッフで再び『ホステル Part 2』を撮影中とのこと。しかも、場所は同じスロバキア。スロバキアのブラティスラバの町には金さえ払えば人を殺すことを含めて、どんな欲望でも満たすことができる組織があるらしい……？ パクストンは決してその組織を壊滅させたわけではないから、大金持ちたちのご乱行は今も続いているかも……？

すると、『ホステル Part 2』ではどんな物語が……？ でも、1度その恐怖を味わってしまうと、2度目はやはり二番煎じになるのでは……？

2007(平成19)年1月9日記

ミニコラム

### 表紙撮影の舞台裏 (5)

表紙撮影の構想は決まったものの、さてそれをどこで撮影するか？そこで選ばれたのは、6月15日に初試写が実施された四ツ橋沿いの一等地京富ビル8階にある、株式会社ギャガ・コミュニケーションズの試写室。7月から本格稼働とのことだったが、念願の試写室誕生の喜びを共有しながら、私たち事務所のスタッフが表紙写真の撮影に専念したのは6月19日の午前中のことだ。

表紙写真の撮影は、何度も経験を重ねてくるとモデルはもちろん、カメラ

マンや照明係さらに衣装係や化粧係(?)も手馴れたものとなり、次第にプロの域に？ 高級一眼レフデジカメが庶民のものになった昨今は実に便利なもので、撮影とチェックをくり返すことによって、ベストアングルとベストポーズの決定が容易にできるようになった。もちろん今や、モデルの笑顔づくりもプロ並みに(?)手馴れたもの。タツプリ2時間かけた表紙撮影は楽しいものだったが、さてその出来は？

2007(平成19)年7月13日